



2017年4月、紀尾井ホール室内管弦楽団
首席指揮者に就任したライナー・ホーネック。
今回から6回にわたる連載で、
インタビューや密着取材を通して
その人となりに迫ります。



ヴァルガウ溪谷の 村に生まれた第8子

取材・文 岡本和子

北はバイエルン州独、西はリヒテンシュタイン、西と南はスイスに隣接する、オーストリア最西部フォアアーベルク州。1961年、ライナー・ホーネックは高い山々に囲まれた溪谷に広がるネンツィングという人口5000人ほどの村に、姉4人、兄3人、妹1人の9人兄弟の第8子として生まれた。「父は村の郵便配達員で、若いころツイターの名手だったようですが、私は聴いたことがありません。母は妹が生まれて間もなく、私が4歳のときに亡くなりました。だから母の記憶はほとんどありません」

生計はいつも火の車だったが、家にはピアノがあり、熱狂的な音楽愛好家だった父は子供全員に何か楽器を学ばせた。「父は男手ひとつで私たちを育てて

くれました。とても規律を重んじる人で、贅沢は一切せず、音楽がすべてでした。母の死から3年後、定年を機に、子供に良い音楽教育を受けさせたい一心で、父は一家でウィーンへ移住する決意をしました。貯えもほとんどないうえ、幼子を含む子供9人を連れていくわけで、村の親戚には「無茶だ」と猛反対されたそうです。一家でウィーンに引っ越したのは、1969年、私が8才のときです」

音楽の都で子供を全員音楽家にする「夢」を実現すべく、父は先生探しに奔走し、子供たちの稽古を厳しく見守った。その甲斐あって、9人中4人がプロの音楽家になった。現在のピッツバーグ交響楽団の首席指揮者マンフレッド・ホーネックは2歳年長の兄である。

「マンフレッドの上の兄はもう70歳で、すでに定年退職していますが、フランクフルト歌劇場で練習ピアノリストとして活躍していました。また妹はウィーン・フォルクスオーパー管弦楽団のチェリストです。父は「絶対的な存在」でしたが、父の望みは私たち子供



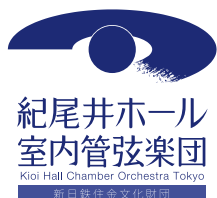
でいたという。13歳から15歳のころは何かに憑かれたように練習ばかりしている青年で、先生から出される課題だけでは物足りなくなつて、自分でいろんな練習曲を探してきてひたすら弾いていた。「今思えば、ちょっと病的だったかもしれない」と当人は苦笑するが、年齢的に何事にもめりこみやすい年頃だったのかもしれない。



「子供ですからサボりたくなることもありました。毎日弾く習慣が身体に染みついてしまえば、一日練習しないだけで落ち着かなくなりませう。今でも」

子供のころから音楽家以外目指す職業はなく、気が付いたらプロの道を歩んできたという。13歳から15歳のころは何かに憑かれたように練習ばかりしている青年で、先生から出される課題だけでは物足りなくなつて、自分でいろんな練習曲を探してきてひたすら弾いていた。「今思えば、ちょっと病的だったかもしれない」と当人は苦笑するが、年齢的に何事にもめりこみやすい年頃だったのかもしれない。

1 ほったを押さえているホーネック君の写真は初めてのヴァイオリン・レッスンを受けた直後に撮影されたもの 2 ネンツィング村の生家は今もホーネック家が所有 3 亡きお父様の写真は、お姉様の結婚式で撮影されたもの



紀尾井ホール
室内管弦楽団
Kioi Hall Chamber Orchestra Tokyo
新日鉄文化財団

パリ室内管で長年にわたり優れた手腕を発揮してきたジョン・ネルソンが3年ぶりに登場。

第107回定期演奏会

6/30(金)・7/1(土)
19:00 14:00

指揮：ジョン・ネルソン ピアノ：小菅 優
ルーセル：「蜘蛛の響宴」から 交響的断章
ショパン：ピアノ協奏曲 第2番 へ短調 Op.21
ビゼー：交響曲 八長調